



IDÉE CRAFTS

GUIDO DE ZAN Exhibition

ガイド・デ・ザン「描画の世界」展

2016年3月4日(金)～30日(水)



まるで絵画の世界から抜け出したような2次元的なユニークな佇まい、線画を用いた独特な表現で魅力溢れる作品をつくり出す陶芸家・ガイド・デ・ザン氏。その作品の数々は、ミラノの旧市街、サン・ロレンツォ聖堂の近くにある小さなアトリエで生まれています。

ガイド氏は、1947年イタリア・ミラノ生まれ。大学では社会学を学び、その後、精神科医のアシスタントとして障害児の教育に従事。その後、おおよそ8年を費やした知的な仕事・研究から距離を置く必要を感じ陶芸を始めることにしました。なぜ陶芸か？それには地球・大地のような自然の力強い素材を使って自分を表現する必要があると感じたことが大きな要因でした。そこから磁器の魅力に魅了され、1978年頃より現在の地にアトリエを構え本格的な活動をスタート。陶芸をはじめた当初、2～3年はろくろ使用し、器など家庭で使う作品を中心に制作していました。その後、約10年に渡り日本の"楽焼"の技術についての研究を行います。楽焼の技法はここ20年アメリカやヨーロッパの陶芸家にも使用される技法です。その工程から、使用目的の作品づくりから人形や動物のオブジェ、パネルなどより象徴的なかたちの制作へ移っていきました。その製法も、ろくろから平板技法のようなさまざまな技法を用いて、現在のような独創的な作品を生み出していくようになりました。

ガイド氏の作品づくりで用いられている平板技法とは、粘土を手で薄い板状にのばし、2枚張り合わせ、立体的に形成し、電気炉で素焼き、乾燥します。その後、内側だけに釉薬をかけ、そしてもう一度高温（1240℃）で本焼きをし、硬質な磁器つくります。特徴的な線画は、ベースが黒地のものは、粘土を乾燥させる前の状態で、粘土の表面をグラフィカルに削り、白地のものは、乾燥させたのち、表面に陶器専用のパステルで描画をし、本焼きします。その線画のモチーフは、東洋の表意文字、日本の文化や禅の哲学などにも関係しており、また、50年代のアメリカの絵画（サイ・トゥオンブリーやマーク・トビー等）からもインスピレーションを受けているとのこと。描かれた線画によって、作品に繊細ながらも活き活きとした豊かな表情を作り出しています。

豊かな表情をつくり出すテクスチャー

生前、ガイド氏と親交のあったデザイナー、ブルーノ・ムナリー氏もガイド氏のウェブサイトにて、彼の作品の特徴でもある表面のテクスチャー（質感）について「Skin of Clay（土の肌）」と題して言葉を綴っています。

「Skin of Clay（土の肌）」

植物にも、動物にも、鉱物の世界でも自然界に存在するものは形状の仕上げとしてテクスチャーが備わっている。

土（やきもの）にはテクスチャーをもつものと、もたないものがある。完璧に滑らかな場合は、その形のみが人の興味の対象となるが、テクスチャーのある肌をもった時はさらに興味が深まり、観察する理由が一つ増える。

ここでガイド・デ・ザンに会いに彼のワークショップを覗いてみよう。ガイドは、形状に合った特定の肌質を与えることに重点をおいている数少ない陶芸家の一人である。結果として、自然界においてカタツムリの肌と蛇の肌が違うように、それぞれの肌の特徴はその形状に合ったものとなり、形も違えばその表面のテクスチャーもそれぞれ異なっている。彼が表現する質感には、アルファベットの一字が並ぶ奇妙な筆跡のようなテクスチャーもあれば、水平方向に施されたパターンもある。彫りが浅いものもあれば、すごく繊細に施されているものもあり、ものによっては散りばめられたいくつかのサインのような模様が入っている。私はこれからダビデに会う約束があって自分のスタジオに戻らないといけなけれども、どうか時間をかけてテクスチャーとその作品をじっくり観察してほしいと思う。

ブルーノ・ムナリー 1994年

今回IDÉE CRAFTSでは、「描画の世界」と題してガイド・デ・ザンの新作の花器の他、オブジェや陶板など形もさまざまなアート作品を揃えています。ぜひ、彼のこだわりでもあるテクスチャーとその作品をじっくりとご覧ください。

